



食品衛生基準審議会新開発食品調査部会
遺伝子組換え食品等調査会

ゲノム編集技術を利用して得られた豚の食品衛生上の取扱いについて

2026年2月24日(火) 一般社団法人全国消費者団体連絡会

現在の全国消団連の活動



一般社団法人 全国消費者団体連絡会

「消費者の権利の実現とくらしの向上、消費者団体活動の活性化と
消費者運動の発展に寄与すること」を目的として活動

【会員団体】 47団体 (2025年5月末現在)

地域単位の消費者連絡組織 25 全国的消費者団体組織 14 消費者問題に関わる非営利組織 8

団体間で緩やかにつながりながら、消費者問題、食品の安全・表示、環境・エネルギーなど、くらしに関わる様々なテーマについて、国の審議会等への委員参加や意見書の提出などを通して、消費者の立場から意見発信を進めています。

また、消費者団体をはじめ、専門家や行政などとのネットワークづくりや国際消費者機構(CI)との連携を進め、学習活動・政策提言・立法運動に取り組んでいます。

現在の全国消団連の活動



* 消費者のくらしに関わる様々なテーマ

- ・ 消費者政策分野
- ・ 食の安全・表示分野
- ・ 環境・エネルギー分野



- 国の審議会等への委員参加
- 意見書等の提出
- 学習会等の開催
- 法改正等に関するロビー活動

* 機関誌「消費者ネットワーク」の発行

* HP、X（旧Twitter）、Facebookによる情報発信

* これらを通して、消費者の立場からの意見発信をすすめている

また、消費者団体をはじめ専門家や行政などとのネットワークづくりや、国際消費者機構（CI）との連携をすすめ、学習活動、政策提言、立法運動に取り組んでいる

全国消団連でのゲノム編集食品に関する学習会

- ・2016年2月 『新たな育種技術（NPBT）の研究開発・実用化の動向について』
農林水産省農林技術会議事務局
- ・2016年7月 『第2回新たな育種技術（NPBT）の研究開発・実用化の動向について』
筑波大学、農林水産省農林技術会議事務局
- ・2017年9月 『 私たちの、そして世界の食生活を支える品種改良』
農業・食品産業技術総合研究機構
- ・2018年12月 『ゲノム編集技術を利用した食品の取り扱いについて』
国立医薬品食品衛生研究所、厚生労働省新開発食品保健対策室
- ・2020年7月 『ゲノム編集技術応用食品～今とこれからを知る～』
厚生労働省新開発食品保健対策室
- ・2022年8月 『ゲノム編集食品 もっと知って考えましょう』
リージョナルフィッシュ株式会社、厚生労働省新開発食品保健対策室

厚生労働省 薬事・食品衛生審議会での関わり

- ・薬事・食品衛生審議会 食品衛生分科会 委員 2017年3月～

(以下、参考人委員として議論に参加)

- ・新開発食品調査部会

「新たな育種技術を利用して得られた食品の取扱いについて」

2018年12月18日～ 2019年3月18日 (計4回)

- ・遺伝子組換え食品等調査会

「ゲノム編集技術応用食品の後代交配種等の取扱い整理」

2020年9月15日～11月27日 (計4回)

- ・遺伝子組換え食品等調査会

「ゲノム編集技術を利用して得られた魚類の食品衛生上の取扱いについて」

2021年2月10日～6月25日 (計5回)

2022年度 ゲノム編集食品に関するアンケート調査

1. 調査の背景と目的

ゲノム編集技術応用食品に対して疑問や不安を持っている消費者に対してどのようなリスクコミュニケーションを行なえばいいのか考察するために実施。

2. 調査方法と調査時期

広く一般消費者の認識や意向を把握するインターネットアンケート調査（認知度調査）を調査委託先の（株）マクロミルの協力で 2022年6月に実施。

3. 調査対象

20～69歳の男女（年齢別人口分布） 有効サンプル数：554人

※食品に関する調査のみの情報で、インターネット調査の参加募集をして、モニター参加いただいた

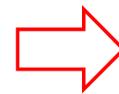
4. 分析方法

調査会社（株）マクロミル提供の集計ソフトを使用して、全国消団連にて分析。

食の安全について、もっとも関心があること（単一回答）

食の安全について、「食品添加物」22.4%・「原産地」18.1%・「健康食品」16.6%
「食中毒」10.8%「食物アレルギー」9.9%をもっとも関心があると回答した人が多かった。
特に「食品添加物」は22.4%と高かった。「ゲノム編集食品」への関心は2.6%と低い回答だった。

単一回答	n	%
全体	(343)	(100)
食品添加物	77	22.4
原産地	62	18.1
健康食品	57	16.6
食中毒	37	10.8
食物アレルギー	34	9.9
遺伝子組み換え食品	21	6.1
輸入食品	19	5.5
化学物質	16	4.7
残留農薬	11	3.2
ゲノム編集食品	9	2.6

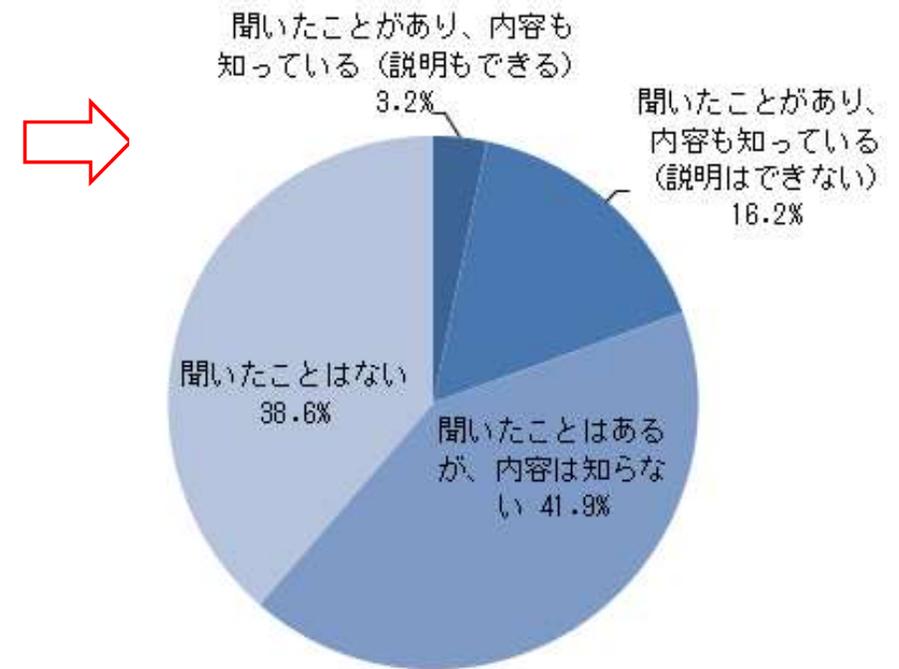


「ゲノム編集食品」という言葉を聞いたことがあるか

約8割の方は「聞いたことはあるが、内容は知らない」「聞いたことはない」と回答した。その中で、特徴的なのが、「聞いたことがあり、内容も知っている（説明はできない）」について、男性が23%だったのに対して、女性は9.4%だった。性別による認知の差が見られた。

	単一回答	n	%
	全体	(554)	(100)
1	聞いたことがあり、内容も知っている（説明もできる）	18	3.2
2	聞いたことがあり、内容も知っている（説明はできない）	90	16.2
3	聞いたことはあるが、内容は知らない	232	41.9
4	聞いたことはない	214	38.6

		全体 (554)				(%)
		聞いたことがあり、内容も知っている（説明もできる）	聞いたことがあり、内容も知っている（説明はできない）	聞いたことはあるが、内容は知らない	聞いたことはない	
全体		3.2	16.2	41.9	38.6	
性別	男性	2.9	23.0	41.4	32.7	
	女性	3.6	9.4	42.4	44.6	
年代別	20代	5.6	15.7	34.8	43.8	
	30代	4.1	11.5	35.6	48.5	
	40代	2.3	16.0	39.7	42.0	
	50代	3.3	20.0	45.8	30.8	
	60代	1.8	16.8	51.3	30.1	
性年代別	男性 20代	4.3	21.7	37.0	37.0	
	男性 30代	3.9	17.6	33.3	45.1	
	男性 40代	3.0	22.7	37.9	36.4	
	男性 50代	1.7	26.7	48.3	23.3	
	男性 60代	1.8	25.5	49.1	23.6	
	女性 20代	7.0	9.3	32.6	51.2	
	女性 30代	4.0	6.0	38.0	52.0	
	女性 40代	1.5	9.2	41.5	47.7	
	女性 50代	5.0	13.3	43.3	38.3	
	女性 60代	1.7	8.6	53.4	36.2	

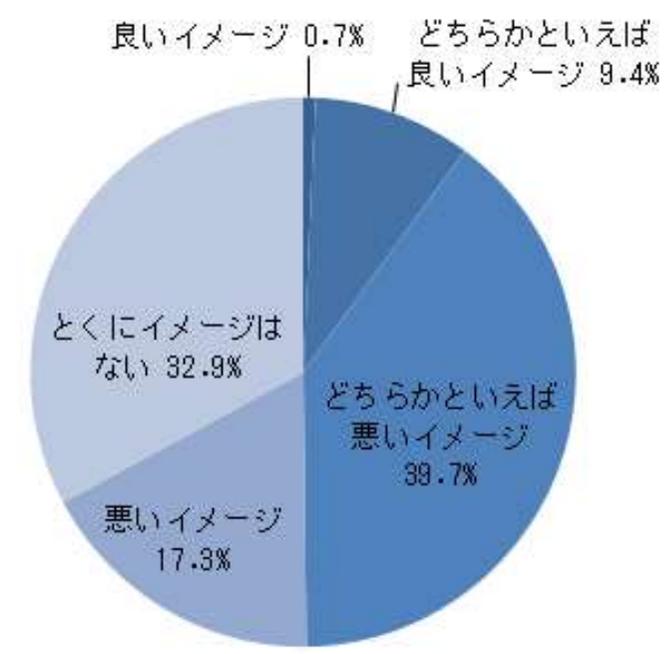
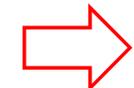


「ゲノム編集食品」に対してどういうイメージがあるか

※ゲノム編集食品について聞いたことがない方にもイメージで回答いただいた

全体の約6割の方が「どちらかといえば悪いイメージ」「悪いイメージ」と回答し、「良いイメージ」「どちらかといえば良いイメージ」と回答した方は約1割だった。残りの約3割の方は「とくにイメージはない」との回答だった。

単一回答	n	%
全体	(554)	(100)
1 良いイメージ	4	0.7
2 どちらかといえば良いイメージ	52	9.4
3 どちらかといえば悪いイメージ	220	39.7
4 悪いイメージ	96	17.3
5 とくにイメージはない	182	32.9

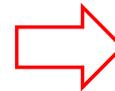


		全体 (n)			
		良いイメージ	どちらかといえば良いイメージ	どちらかといえば悪いイメージ	悪いイメージ
全体	(554)	0.7	9.4	39.7	17.3
性別					
男性	(278)	0.4	11.2	38.1	15.8
女性	(276)	1.1	7.6	41.3	18.8
年代別					
20代	(89)	2.2	9.0	44.9	6.7
30代	(101)	1.0	15.8	30.7	12.9
40代	(131)	6.9	6.9	38.2	28.7
50代	(120)	0.8	10.0	40.8	19.2
60代	(113)	6.2	6.2	44.2	20.4
性年代別					
男性 20代	(46)	2.2	8.7	50.0	6.5
男性 30代	(51)	19.6	19.6	31.4	5.9
男性 40代	(68)	7.6	7.6	31.8	22.7
男性 50代	(60)	13.3	13.3	40.0	18.3
男性 60代	(55)	7.3	7.3	40.0	21.8
女性 20代	(43)	2.3	9.3	39.5	7.0
女性 30代	(50)	2.0	12.0	30.0	20.0
女性 40代	(65)	6.2	6.2	44.6	24.6
女性 50代	(60)	1.7	7.7	41.7	20.0
女性 60代	(58)	5.2	5.2	48.3	19.0

「ゲノム編集食品」に対するイメージの理由は何か、 その中でもっともあてはまる理由は何か

ゲノム編集食品に対して持っているイメージの理由として、
複数回答では全体の2割から3割の方が「不安である」「情報が少ない」「安全とは思えない」を選択し、
単一回答では「情報が少ない」16.8%「不安である」14.8%「安全とは思えない」9.9%が多かった。

複数回答	n	%
全体	(554)	
不安である	154	27.8
情報が少ない	128	23.1
安全とは思えない	111	20.0
信頼できない	78	14.1
健康を阻害する	52	9.4
食文化への影響がある	39	7.0
先進的な技術開発である	38	6.9
環境への影響がある	34	6.1
国の規制がない	32	5.8
安定供給できる	24	4.3
食料問題の解決につながる	22	4.0
持続可能な生産である	20	3.6
おいしくない	20	3.6
価格が高い	18	3.2
SDGsへの貢献になる	14	2.5
価格が安い	11	2.0



最も当てはまる理由 (単一回答)	n	%
全体	(554)	
情報が少ない	93	16.8
不安である	82	14.8
安全とは思えない	55	9.9
信頼できない	27	4.9
健康を阻害する	21	3.8
先進的な技術開発である	13	2.3
食文化への影響がある	11	2.0
持続可能な生産である	10	1.8

※「わからない」、「興味がないが」
がそれぞれ16.1%、16.4%あった

ゲノム編集食品について 自由記述からの意見

- 聞き慣れないので、まだ詳しくどんな物か分かっていない。
- 品種改良の一環だと思っはいるが、操作の過程などが不透明すぎて本当のところはどこまで行っているのかさっぱりわからない。
- 世間に公開する際は良い面だけでなく、課題になっていることやリスクなども発信して欲しい。
- 安心安全であることが確実にわかる証拠を示してほしい。
- 様々な立場の意見を公平に比較・分析できればある程度不安も払しょくできるのではないか。
- 食の安定供給のために役立つのなら、気軽に情報を得れるコンテンツを紹介して欲しい。
- TikTok や YouTubeで短時間の動画を作成してわかりやすく説明してほしい。
- 人体に与える影響は、これからわかっていくことだと思うので今のところ全く信用できない。
- そもそも遺伝子操作されているのかと思うと人工的だし不自然な感じがする。
- そういう過程で生産された農産物を摂取することに不安を感じる。
- これまで普通に食べられた食品が変わることによってアレルギー反応を起こしたりしないのか心配。

現状の整理（アンケートの総括）

- 多くの消費者はゲノム編集を知らない、関心がない、判断ができない
- 情報が少ないことや、漠然としたイメージから何となく不安を感じる
- 一部の強い関心を持つ層が、強く反対の姿勢を表すこともある
- ゲノム編集技術について、議論は未成熟で社会的な合意には至っていない

ゲノム編集技術応用食品 全国消団連のスタンス

・安全性

ゲノム編集技術で起こる変異は、自然界や従来育種でも起こり得る範囲のものであれば、自然界や従来育種と同等の安全性が確保されていると考えられるため、現時点においてゲノム編集技術応用食品の安全性について特に問題はないと考えます。

・表示

ゲノム編集技術による変異と、従来の育種技術等による変異とを科学的に判別することが困難であるため、現時点で表示の「義務化は難しい」ことを理解しています。しかし、消費者にとって選択のための表示は重要であることから、開発事業者には積極的な表示や、自主的な情報開示が行われるよう対応を求めています。

・理解促進

消費者は新しい技術に対して漠然とした不安を持っている人も多いことから、分かりやすく丁寧な説明や、双方向でやり取りできるコミュニケーションによって理解促進を図ることが重要と考えます。

「ゲノム編集技術を利用して得られた 豚の食品衛生上の取扱いについて」

- ゲノム編集技術の進化と価値を認識し、豚に応用されることについて、社会的な意義があるものと理解します。
- ただし消費者の理解が十分に追いついていないため、拙速な議論にならないよう、安全性の評価を第一に、分かり易い情報の開示についても丁寧に議論を進めてください。
- 長期的な影響の評価や、現在の制度である「事前相談」と「届出」の適用の妥当性についても検証をしてください。
- 消費者メリットを明確にしながら開発を進めてください。
例：供給量の安定、適正な価格、高品質、疾病による殺処分がないこと等

- ゲノム編集豚に限らず、畜産業全体の将来性をふまえ、社会全体の課題として検証を進めてください。
 - 動物福祉の観点も十分に議論してください。
- ① ウイルスの感染に抵抗性があることを理由に、豚の飼育状況が変わることや、生産効率ばかりが重要視されることがあってはならない。
 - ② ゲノム編集豚の生産拡大によって豚がPRRSウイルスに感染しなくなることは良いことだが、一方で全く分からない新しい病原体あるいはウイルスが出現する可能性や、他の感染症にかかりやすくなることが懸念される。

- 消費者が選べる仕組みとしての「表示の在り方」については、改めて十分に論議されることを望みます。
- 輸入豚肉として流通する際のトレーサビリティの確立と、情報伝達の仕組みづくり、さらに海外から「種ブタ」として提供されたものが国内で飼育されて、豚肉として流通する場合の情報提供の在り方も検討してください。
- 消費者に向けては、開発の段階に応じて、透明性のある情報の提供と分かり易い説明をお願いします。

ご清聴ありがとうございました。